

1人1台端末の活用が小学校の高学年の児童が 作成する作文の評価と意識に及ぼす影響

The Use of One Terminal per Person is an Elementary School Upper Grade
child Evaluation of Written Essays and its Effect on Consciousness

小泉遥香

Haruka Koizumi

信州大学教育学部

Faculty of Education, Shinshu University

<あらまし> 本研究の目的は、小学校の高学年の児童が作文作成を行う際に、原稿用紙を使用した場合と、クラウド上の文章作成ツールを活用した場合の児童の作文と、作文を作成する際の意識への影響について調査することである。そのために、小学校の高学年の国語の授業において、原稿用紙と、1人1台端末を活用し、クラウド上の文章作成ツールを用いた作文作成の実践を行い、①小学校の教員2名による作文の評価、②児童による作文を作成した際の意識を尋ねる意識調査を行った。作文の評価の結果、原稿用紙よりも情報端末を活用した状態で作成する作文の方が、作文の全体の評価を有意に高めた可能性があることが示唆された。意識調査の結果、学級Aの児童は、情報端末を活用した作文作成が、文字の書き直しの負担を減らすことから書きやすさを感じていること、学級Bの児童は、他の人の進捗状況を確認できることや文章を書くことに時間がかからないことなどから書く意欲が向上したことが示唆された。

<キーワード> 1人1台端末 小学校 高学年児童 国語科 作文教育

1. はじめに

「Society5.0時代」の到来や、新型コロナウイルスの感染拡大など「予測困難な時代」などの社会の変化によって、GIGAスクール構想によるICTを活用した教育が求められている。1人1台端末やクラウド型ツールを活用した先行研究はこれまでも行われてきた。森下・東原(2014)は、タブレット端末を活用した協働学習を初めて受けた学習者はどのような点で学習活動を「楽しい」と感じるかを明らかにするため、量的・質的研究法を統合し、1つの研究のなかで同時かつ補完的に扱うことを目的としたトライアングレーション混合研究法を試みた。その結果、学習者らは「それぞれの学習者の考えを電子黒板上に提示することで自他の考えを可視化し、友達の考えを共有・比較できたこと」、「普段使用していないタブレット端末を使用することができたこと」によって「楽しい」と感じていたことが明らかになった。加えて、タブレット端末が持つ様々な機能は、学習者の潜在的な興味・関心を引き付ける可能性を示唆し

た。

作文指導の課題について村石(1979)は、「作文指導の実態調査」を行い、作文指導の実態に対する期待水準について回答を求めた。その結果、小学校の高学年では、作文を苦手とする児童が多いことから作文指導の問題点を引き起こしやすい原因となっていることが示唆された。また、竹内(1954)においても、子ども自身の問題として、「作文は嫌い」という声が圧倒的に多く、書くことに大きな抵抗感を感じ、苦痛を感じていることが挙げられている。

これらの作文指導の課題を克服するために、1人1台端末を活用した作文作成に関する実践が報告されている。高井(2018)は、作文指導の課題について、手書きでの推敲の繰り返しは、書く意欲の減退につながると述べており、課題を克服するために1人1台のChromebookが使用可能な中学1年生を対象とした作文ワークショップの実践を行った。その結果、ワープロ機能をもつアプリケーションの活用により、学習意欲を持続させなが

らも書き直しの負荷を軽減し推敲活動の頻度を高めることができたことが報告された。さらに、高井 (2021) は、テレビ電話を活用し、専門家の書こうとする内容の指導を取り入れた作文ワークショップを計画・実践し、検討を行った。その結果、作文カンファレンスにより、学習者一人ひとりの「書く過程」に応じた指導を行い、学習者は「ゼロから書く楽しみ」を味わいながら書くことの力を高めていくことができたことが報告されている。さらに、専門家のテレビ電話指導を活用した作文指導の結果、学習者は得た情報を活用しながら作品の質を高めていくことができたことが報告された。

これらの先行研究から、作文作成の場面における1人1台端末の活用が、学習者の作文を書くことに対する意欲や作品の質の向上に効果的な側面があることが示された。

しかし、小学校の国語科において、高学年の児童を対象とした、原稿用紙での作文作成と、クラウド上の文章作成ツールを活用した作文作成の、作文や児童の意識に及ぼす影響について、先行研究では検討されていない。今後は、情報端末を活用した作文作成が増えていくことを鑑みれば、その効果を明らかにするという点で意義がある。

2. 研究の目的

本研究は、小学校の高学年の児童が作文作成を行う際に、原稿用紙を使用した場合と、クラウド上の文章作成ツールを活用した場合の児童の作文と、作文を作成する際の意識への影響について調査することを目的とした。

3. 研究の方法

3.1. 調査時期・調査協力者

予備実践は、2022年11月下旬に学級Aで1回、12月上旬に学級Bで1回、本実践は、2022年11月下旬～12月中旬に学級Aで3回、学級Bで3回行った。調査協力者は、日常的に1人1台端末を活用しているN県M市にある国立のX小学校第5学年1学級28名(以下、学級A)、同じく1人1台端末を活用しているN県N市にある公立のY小学校第6学年1学級20名(以下、学級B)であっ

た。

3.2. 活用ツール

予備実践では、タイピング教材 (Benesse マナビジョン 1998) を用いて児童のタイピングにおける入力速度の測定を行った。本実践では、共同編集機能を有するクラウド型ツールとして、Google スライドを用いて作文の作成を行った。

3.3. 調査手順

調査手順全体を図1に示す。両学級において、予備実践1回、本実践3回の作文作成の授業実践を行った。本実践2時間目、3時間目の作文の作成終了後に、児童はGoogle フォームの意識調査に回答した。児童が作成した作文は、小学校教員2名が評価を行った。

3.4. 評価方法

予備実践では、両学級の児童が1人1回、タイピングにおける入力速度の測定を1分間で行い、タイピングの終了後、児童はGoogle フォームを用いてタイピング文字数を記録した。そして、児童が記録したタイピング文字数を、学級A、学級Bそれぞれにおいて平均値、標準偏差を算出した。本実践1時間目では、①小学校教員2名が行った児童の作成した作文の評価のみを用いた。本実践2時間目、本実践3時間目では、①小学校教員2名が行った児童の作成した作文の評価、②児童の意識調査の2点を用いた。

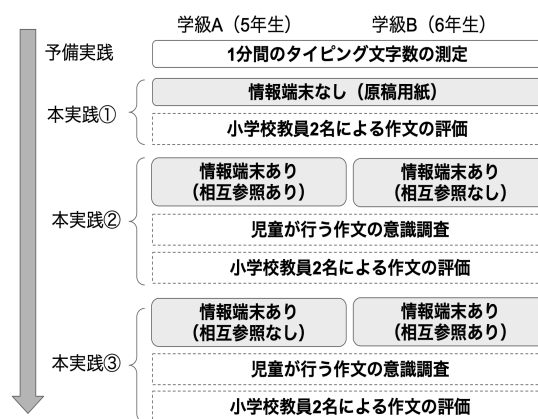


図1 調査手順全体

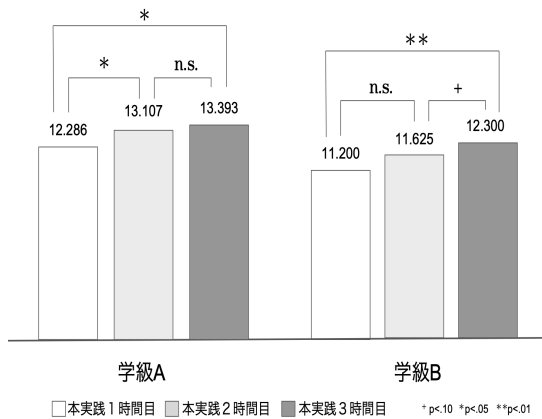


図2 作文の合計点の平均値の比較

4. 結果と考察

4.1. 作文の評価の結果と考察

被験者間の作文の合計点の平均値の比較を図2に示す。学級Aの児童が作成した作文の合計点の平均値は、本実践1時間目（原稿用紙）は12.286点（ $SD=2.319$ ），本実践2時間目（参照あり）は13.107点（ $SD=2.105$ ），本実践3時間目（参照なし）は13.393点（ $SD=2.123$ ）であった。本実践2時間目（参照あり）の方が本実践1時間目（原稿用紙）よりも合計点が高く、有意差（ $p<.05$ ）がみられた。また、本実践3時間目（参照なし）の方が本実践1時間目（原稿用紙）よりも合計点が高く、有意差（ $p<.05$ ）がみられた。

学級Bの児童が作成した作文の合計点の平均値は、本実践1時間目（原稿用紙）は11.200点（ $SD=2.414$ ），本実践2時間目（参照なし）は11.625点（ $SD=2.394$ ），本実践3時間目（参照あり）は12.300点（ $SD=2.726$ ）であった。本実践3時間目（参照あり）の方が本実践1時間目（原稿用紙）よりも合計点が高く、有意差（ $p<.01$ ）がみられた。また、本実践3時間目（参照あり）の方が本実践2時間目（参照なし）よりも合計点が高く、有意傾向（ $p<.10$ ）がみられた。

これらの結果から、原稿用紙よりも情報端末を活用した状態で作成する作文の方が、作文の全体の評価を高めた可能性があることが示唆された。

4.2. 意識調査の結果と考察

意識調査2回目のセクション4の「あなた

がこれまでに書いた作文について教えてください。」の分析結果を表1に示す。

学級Aの、意識調査2回目のセクション4の「項目1：原こう用紙と、Google スライド（他の人の作文が見える状態）と、Google スライド（他の人の作文が見えない状態）では、どの状態が一番作文を書きやすかったですか。」の回答は「原稿用紙」が4人、「相互参照あり」が11人、「相互参照なし」が13人であり、「原稿用紙」よりも「情報端末（相互参照あり・なし）」の方が、回答数が多かった。また、「項目2：なぜ、その順番で選んだのか理由を教えてください。」の自由記述では、「情報端末（相互参照あり・なし）」を選んだ児童の回答の理由として、「手が疲れない」、「原稿用紙よりも時間がかからない」などが挙げられた。

「項目3：原こう用紙と、Google スライド（他の人の作文が見える状態）と、Google スライド（他の人の作文が見えない状態）では、どの状態が一番作文を書く意欲が上がりましたか。」の回答は、「原稿用紙」が8人、「相互参照あり」が6人、「相互参照なし」が14人であり、「原稿用紙」よりも「相互参照なし」の方が、回答数が多かった。また、「項目4：なぜ、その順番で選んだのか理由を教えてください。」の自由記述では、「相互参照なし」を選んだ児童の回答の理由として、「他の人が自分の作文を見るプレッシャーがない」、「タイピングだからすぐ修正できる」などが挙げられた。

学級Bの、意識調査2回目のセクション4の「項目1：原こう用紙と、Google スライド（他の人の作文が見える状態）と、Google スライド（他の人の作文が見えない状態）では、どの状態が一番作文を書きやすかったですか。」の回答は「原稿用紙」が7人、「相互参照あり」が8人、「相互参照なし」が5人であり、「原稿用紙」よりも「相互参照あり」の方が、回答数が多かった。また、「項目2：なぜ、その順番で選んだのか理由を教えてください。」の自由記述では、「他の人の作文を参考にできるから」、「書く時間を短縮できるから」などが挙げられた。

表1 セクション4の結果

どの状態が一番作文を書きやすかったですか。			
	原稿用紙	相互参照あり	相互参照なし
学級A	4	11	13
学級B	7	8	5

どの状態が一番作文を書く意欲が上がりましたか。			
	原稿用紙	相互参照あり	相互参照なし
学級A	8	6	14
学級B	3	12	5

「項目3：原こう用紙と、Google スライド（他の人の作文が見える状態）と、Google スライド（他の人の作文が見えない状態）では、どの状態が一番作文を書く意欲が上がりましたか。」の回答は、「原稿用紙」が3人、「相互参照あり」が12人、「相互参照なし」が5人であり、「原稿用紙」よりも「相互参照あり」の方が、回答数が多かった。また、「項目4：なぜ、その順番で選んだのか理由を教えてください。」の自由記述では、「iPadの方が文章を書くのに時間がかからない」、「他の人の作文が見れた方がもっと自分も書かなきゃ！と思えるから」などが挙げられた。

これらの結果から、学級Aの児童は、情報端末を活用した作文作成が、文字の書き直しの負担を減らすことから書きやすさを感じていること、情報端末を活用して相互参照がない状態の作文作成が、周りの目を気にせず書き進めることができることから、書く意欲が向上したことが示唆された。学級Bの児童は、情報端末を活用して相互参照がある状態の作文作成が、他者の作文を参考にできることから書きやすさを感じていること、他者の進捗状況を確認できることや文章を書くことに時間がかからないことから、書く意欲が向上したことが示唆された。

5. まとめと今後の課題

本研究は、小学校の高学年の児童が作文作成を行う際に、原稿用紙を使用した場合と、クラウド上の文章作成ツールを活用した場合の児童の作文と、作文を作成する際の意識へ

の影響について調査することを目的に、小学校の高学年の国語の授業において、原稿用紙と、1人1台端末を活用し、クラウド上の文章作成ツールを用いた作文作成の実践を行い、①小学校の教員2名による作文の評価、②児童による作文を作成した際の意識を尋ねる意識調査を行った。

作文の評価の結果、情報端末を活用した状態で作成する作文の方が、作文の全体の評価を高めた可能性があることが示唆された。意識調査の結果、学級Aの児童は、情報端末を活用した作文作成が、文字の書き直しの負担を減らすことから書きやすさを感じていること、学級Bの児童は、他の人の進捗状況を確認できることや文章を書くことに時間がかからないことなどから書く意欲が向上したことが示唆された。

今後は、対象学年や作文の題材を変えて、作文や作文を作成する際の意識の変化について検討することや、被験者間で作文の評価、意識調査の結果を分析することを課題とする。

参考文献

- Benesse マナビビジョン(1998) タイピング練習(日本語編). <https://manabi-gakushu.u.benesse.ne.jp/gakushu/typing/nihongonyuryoku.html> (参照日 2023.01.23)
- 森下孟, 東原義訓(2014) タブレット端末を活用した協働学習を初めて受けた学習者が感じる“楽しさ”への一考察. コンピュータ・エデュケーション, 37 : 73-78
- 村石昭三(1979) 小学校の作文指導の実態(〈特集〉言語感覚の育成). 国語科教育, 26 : 39-46
- 高井太郎(2018) ICTを活用した作文ワークショップの実践—1人1台のChromebookが使用可能な中学1年生を対象として—. 国語科教育, 84 : 49-57
- 高井太郎(2021) 専門家のテレビ電話指導を取り入れた作文ワークショップの実践. 全国大学国語教育学会国語科教育研究 : 大学研究発表要旨集, 140 : 41-44
- 竹内博(1954) 作文教育の問題点. 日本文学, 3 (2) : 23-29